

でんでら通信 第百四十号 平成二十九年八月

八月二十三日（水） 施餓鬼供養会

十時より山門、新亡施餓鬼供養会

今年初盆を迎えられたお家の方は、準備の都合上、おまいり人数をご連絡ください。

また当日までに白木のお位牌をお持ちください。

十一時より檀信徒施餓鬼供養会

古い旗、塔婆は本堂の箱にお入れください。

当日供養し、新しい旗、塔婆をお渡しします。

◎お志は前日までに持参いただけると助かります

坐禅会

今月は、八月三十一日（木）午前十時より坐禅会を行います。みなさんのご参加をお待ちしております。

縦の糸と横の糸

以前、当寺の開基（寺を建てた人）である千種家の子孫といわれる方が、葬儀の依頼をお願いに参りました。お話を伺うと、その方は千種という姓であるので、当寺が菩提寺である。夫は亡くなったら、三重県の禅林寺で葬儀をしていた。だくようにと遺言されていたものから、ということでした。

禅林寺の歴史から、禅林寺は確かに千種家の菩提寺として建立されました。しかし、その後、戦災で二度焼失（応仁の乱の頃と織田信長が上洛した頃）して江戸時代の初期に再興されました。昔の戦国時代ならば、

敵方の一族は根絶やしにされていたことも考えられますが、生き延びていたこともないともいえません。ご遺言とおり寺で葬儀を執り行いました。

さて、この脈々と繋がれてきた命のバトンというものには不思議です。禅林寺は後醍醐天皇の家臣であった千種忠頭を弔うために子孫である治庸（ちよう）が始祖である忠頭のために菩提寺として建立したと伝えられています。これが千三百年初めです。今からざっと七百年前です。一代を三十年と計算しても約二十三代あります。昔のことですから子供も多く産まれ、多く亡くなったことでしょう。その中から枝分かれしながら夫婦という二人の命、縁が結ばれて次の代へ、次の代へとつながれてきました。忠頭とその妻、その子供夫妻、その孫夫妻、直系だけでも2+2+2・・・その数は2を23回足す46人です。多くの子供が産まれた昔から仮に3人兄弟だとしたら、3×3×3・・・23回掛け算すると・・・電卓では計算できませんでした。

とにかく大勢の方の菩提寺となっています。先ほどの直系46人のうち、一人でも欠けていたら、葬儀を行った故人は存在していません。これは、今を生きるどの人にもいえることですし、各ご家庭のご先祖さまにもいえることでしょう。あるご先祖様は、戦に出ていて、たまたま生えていた草に転倒したおかげで、刀が頭をかすって助かった命もあるでしょう。病に伏せていて医者に見放されていたのに九死に一生を得たご先祖もいたかもしれません。今一度、家系を調べてみると貴重なお話が聞けるかもしれません。

ご先祖を時間の縦の糸とみると、横の糸は、今を生

きる友人、隣人、職場仲間などに当たることでしょう。良き友人、知人に巡り合えていれば幸せですが、中には顔も見たくない嫌な職場の上司、取引先、隣人もいることでしょう。この横の繋がりが、事件や事故の根本要因となっているのが現代です。

数分前に通りがかった交差点で大事故があった、体調がよかったから病に伏せなくて済んだ、心的な病気があったが、人事異動で顔ぶれが変わったら快復したなど、もしかしたら、現在、健康的に過ごせることができるのは、たまたまなのかもしれません。

このように考えると、今、こうしてこの世に生きていられることは、実はすごく尊いことなのです。もしかすると今の命は、何かのはずみで、日本人ではなく、難民として授かっていたかもしれないし、人間ではなく犬だったり、魚だったりあり得ることです。もしかしたら、植物だったかもしれないし、バクテリアだったかもしれないし、蚊に産まれて人間にパチンと叩かれる一生だったかもしれません。

また、お父さん、お母さんが一生懸命育ててくださったからこそ、今の命が永らえていることも大いにあります。この命への感謝を考えると、目の前のすべて、縁の不思議、子供や孫の存在すべてに手を合わさずにはいられません。このような全てのものに慈しみをもって手を合わせる良き機会が、ご先祖様への感謝であるお盆供養であり、ご先祖さま、現代に関わる幾多のご精霊に対してご供養するのがお施餓鬼といわれる施餓鬼供養であるのです。

すべては、「おかげさまで」と謙虚に感謝する心であります。